

令和6年度 合川小学校研修実施計画書

1 研究主題及び教科

研究主題	自ら「問い」をもち、思考を広げ深め合う児童の育成 ～仲間と共に学びを楽しむ授業を通して～
教科・領域	全教科、全領域

2 主題設定の理由

研究の経過と今年度の取組

本校は、令和3年度より、国語科における対話的な学びについて研究・研修を行ってきた。令和5年度は「対話を通じて、自分の思いや考えをもつ子どもの育成～考えをつくるための「しかけ」のある授業をめざして～」という研究主題に基づいて、対話の中で自分の思いや考えをもつ児童を育成するため、国語科の授業改善を中心に研修を進めてきた。

教材文の全文シートやタブレットのスライドなどグループや学級で共有できる具体物を活用することで、「対話の視覚化・焦点化」を促し、仲間の対話をつなげ、深めることができた。また、自分の考えや授業の振り返りを Padlet やオクリンクに蓄積・共有することで、過去の自分や仲間との「自己内対話」や「非同期型の対話」といった直接言葉を交わさない対話の形が生まれ、児童の考えを深めることができた。このような方法や形式を通じて、より多くの児童が対話に参加し、自分の考えを広げたり、深めたりすることができた。

対話的な学びを行う中で、児童は反対意見をあまり出さないことがわかってきた。反対意見が出にくい原因には、本校の背景が関係していると考えられる。本校は全校児童68人であり今年度から鈴鹿市内初の複式学級を有する過小規模校である。そのため人間関係が固定化されてしまう。児童は安定した関係が崩れてしまうことを危惧し、反対意見を出すことに消極的になってしまっている。しかし、本来、よりよい人間関係を築くためには、自分の意志を伝えることが重要である。さらに、異なる視点の意見が出れば、対話はより活発になり、学びはより深いものになる。そこで、本校児童には、反対意見を伝える能力と、異なる意見が出ることは大切であるという価値感を育てていくことで、仲間と共に学びを楽しめるようにしていきたい。

反対意見をもつには、相手の意見を聞くだけでなく、その意見に疑問を抱いたり、評価をしたりした上で、論理的に言語化する必要がある。そのためには、どんな意見もそのまま受け入れるのではなく、常に「問い」をもつことを意識しなければならない。児童があらゆる視点で物事を捉え「問い」をもち、出し合うことで、新たな考えや、より深い考えをもてるような授業を私たちは考えていかなければならない。

また、授業者は、誰もが異なる意見を出し合えるような安心できる学習環境を整えていく必要がある。そして、相反する二つの意見が出たときには、互いの意見の良さを検討させたり、その過程を価値づけたりしていかなければならない。そうすることで、仲間と協働的に学ぶよさや、異なる視点で意見が出ることの面白さを感じさせたい。

以上のことから、本年度の研究主題を「自ら「問い」をもち、思考を広げ深め合う児童の育成～仲間と共に学びを楽しむ授業を通して～」とし、誰もが自分らしい意見を言えるようにすることを研究の重点を置くこととした。

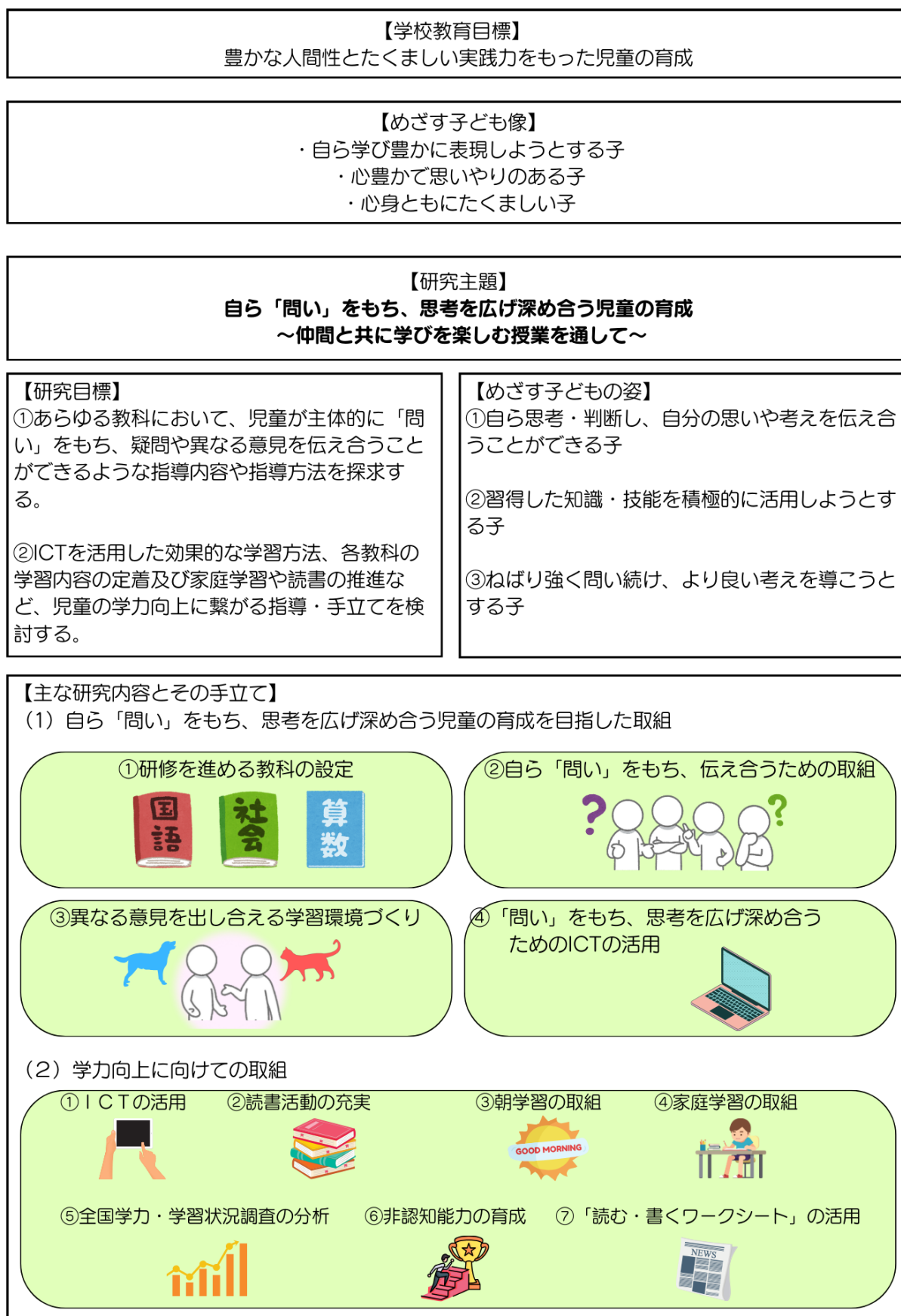
学習指導要領との関わり

小学校学習指導要領解説総則編では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の三つの視点が示されている。その内の「深い学び」については、「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。」と述べられている。

「情報を精査して考えを形成する」「問題を見いだして解決策を考える」といった点は、本校の児童の課題として挙げた「問い」をもつ力であり、重点的に指導していく必要がある。ただし、「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら」とあるように、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」が、授業の中で「問い」をもつ上で重要な視点となると考えられる。そこで、学校として一つの教科に固定して研修を進めるのではなく、各々が軸となる教科を決めながら、あらゆる教科を通して「問い」をもち、伝え合う力を児童に培っていききたい。また、その際にはこれまでの校内研修で培われた国語科における「対話的な学び」の手立てや方策も大切にしていきたい。

3 研究内容及び方法

3.1 研究構想



3.2 具体的な取組

(1) 自ら「問い」をもち、思考を広げ深め合う児童の育成を目指した取組

①研修を進める教科の設定

今年度は、これまで国語科で培われてきた指導方法を基に、あらゆる教科で「対話的な学び」を行う。今年度の主題である「自ら『問い』をもつ」児童を育てるためには、問いをもつ視点が重要になる。それこそが、先述の各教科等の特質に応じた「見方・考え方」である。

例えば、社会科では「なぜこの辺りは家が集まっているのか」といった空間的な視点や、「なぜ伝統工芸は変わらずに続いているのだろうか」といった時間的な視点で考え、問いをもつことができる。算数科であれば、「0.4は0.1が4個と考えて計算できるのではないか」という統合的な視点や、「三角形も平行四辺形と同じように面積を求められるのではないか」といった発展的な視点で問いをもつことができる。このように、各教科の特質を活かしながら、年間を通した研修を進められる教科を判断し、設定していく。

②自ら「問い」をもち、伝え合うための取組

○「問い」を意図的に引き出す

①で述べたように、「自ら『問い』をもつ」ためには視点が重要になる。各教科の見方・考え方を働かせることが難しい段階では、その視点で問いを考えることも容易でない。そこで、「問い」をもたせたい対象に子どもが出会った際に、「面白いと思ったこと」「納得がいかないこと」「私ならこうする」といった視点を与え、感想や授業で取り上げるほどでない素朴な疑問を児童にもたせる。そこに教師が働きかけることで、「問い」を創ることができる。

○「問い」から「めあて」を考える

「めあて」は授業の「ねらい」を児童の立場で示したものである。したがって、「めあて」は児童が自分自身でもつものであり、児童の言葉で表現したい。子どもが問題文や資料などの対象に出会い、生まれた「問い」に対して、どのように考えていけばよいかといった先の見通しがもてたとき、「問い」は授業の「めあて」となる。また、ある考えに対して「本当にそれは正しいのか」といったような考えに反する「問い」が出たときに、それらについて議論したり検証したりすることを「めあて」として授業を展開することができる。自分の「問い」が授業の「めあて」となり、みんなで考える経験を積んでいくことで、児童の「問い」に対する価値が高まるのではないかな。

○「振り返り」の中の「問い」

他者に問いかけたり、異なる意見を発したりすることに抵抗がある児童も、自分自身に問いかける経験を積むことで「問い」の価値に気づかせたい。そこで、昨年度の研修の成果にも挙げた「振り返り」による自己内対話を行わせる。学習の足跡を辿る中で「何がわかったのか」「他のことにも活かさないか」といった「問い」をもつことができるのではないかな。

○ループリックを使った評価

児童が自ら「問い」をもつために、ループリックを使った評価を行わせることが有効であると考えられる。児童にパフォーマンス課題に取り組ませる際に、ループリックを示すことで、児童は「～について書けているか」「～ができていないか」といった「問い」をもち、自己調整しながら課題に取り組むことができる。自己評価が難しい場合は、児童同士の相互評価を行わせたい。ループリックの基準に照らし合わせて「～したほうがいい」と伝えることは、「否定された」という感覚よりも、より良いものにするために「アドバイスしてもらった」という感覚を感じるのではないかな。全学年で繰り返し取り組むことで、相手に意見を伝えることへの抵抗感を減らしていきたい。

○対話的な学びの「しかけ」

昨年度の校内研修で取り組んできた対話的な学びの「しかけ」を引き続き行う。全文シートやタブレットの共有ファイルなどで対話を視覚支援し、相手の思いや考えを正確に把握させる。さ

らに今年度は、それぞれの考えを比較や分類できるように表したり、考えの長所や短所、理由や根拠などが捉えられるように示したりするなどして、相手の意見に対して「問い」をもつための対話の支援を考えていきたい。

③異なる意見を出し合える学習環境づくり

○心理的安全性の保障

誰かの意見に対して「問い」をもったり、異なる意見を出したりするためには、そのグループ内や学級全体が、そうした意見が受け入れてもらえる環境である必要がある。すなわち、心理的安全性が保障されている学習環境でなくてはならない。反対意見に対する児童の反応や、問題を間違えてしまった児童への教師の反応など、日頃の授業の中で心理的安全性を意識して学級づくりに取り組んでいく。

○「問い」や反対意見の価値づけ

②で挙げた「問い」から「めあて」を創る活動や、ループリックを示した相互評価などの経験を積ませるだけでなく、「～さんの『問い』があったから、今日の授業ができたね」「～さんがアドバイスしてくれたから、いい感想文になったね」というように、教師が意識的に「問い」や意見を価値付けていく。そうすることで、「問い」をもつことや反対意見を出すことの有用感が高まり、今年その研修で目指す力を児童につけることができると考える。

④「問い」をもち、思考を広げ深め合うための ICT の活用

昨年度の研修の成果として、児童が対話の中で考えをもつ手立てとして ICT の活用は有効であった。今年度の研修で目指す「問い」をもつためには、昨年度よりも、深く考えたり、様々な視点で考えたりする必要がある。児童が自ら「問い」をもつという目的にあった効果的な ICT の使い方を見つけ、共有していきたい。具体的な活用方法は以下の通りである。

- ・付箋機能を使った「問い」や感想、意見の整理・相互参照 (Google Jamboard / Canva)
- ・ループリックの作成・閲覧 (Google スプレッドシート / Canva)
- ・スライドやカードの 1 人 1 ページ編集・相互参照 (Google スライド / オクリンク / Canva)
- ・振り返りの蓄積・相互参照 (Google スライド / Padlet / Canva)

(2) 学力向上に向けての取組

①ICT の活用

一人一台端末が導入され 5 年目となる。Padlet や Canva など授業で使われるアプリが増えたり、生成 AI が話題になったりとタブレットにより子どもたちの学校生活や校務の仕方は急速に変わりつつある。授業でどのような使い方ができるのか、どんなアプリが役立つのかなどを研究し、共有することで、個別最適で協働的な授業を探究していく。そのためにも情報担当教員を中心に研修会などを開き、職員のタブレット活用能力の向上を進めていきたい。

②読書活動の充実

- ・毎週月・金曜日は朝学習で読書に取り組む。
- ・週に 1 回程度、図書館で本を借りる習慣づけを各学級で工夫する。
- ・学期に 1 回、朝学習の時間に読書タイムを実施する。(期間は 1 週間程度)
- ・学期に 1 回、「お話宅配便」(教師による読み聞かせ)を実施する。
- ・夏休み・冬休みに「おうちで読書」の取組を行う。
- ・図書まつりを年間 2 回実施し、児童の読書に対する意欲向上を図る。
- ・各学期及び年間の多読賞を表彰し、児童の読書に対する意欲向上を図る。
- ・図書委員による読み聞かせを計画する。
- ・読書記録カードへの記入を徹底する。

③朝学習の取組

- ・基礎学力を向上させるための取組として、4年生以上は8時30分から8時45分までの15分間、モジュール学習を行う。内容は、各学年の実態に合わせて柔軟に実施する。
- ・1～3年生は週に1回、4～6年生は3週に1回のサイクルで、モーニングイングリッシュを実施し、ゲームや歌を通して外国語に触れる。

④家庭学習の取組

- ・校区共通の「家庭学習の手引き」を1年生の保護者へ配付する。家庭学習の意義や家庭での取り組みせ方、時間の目安等を保護者に周知することで、学校と家庭が一体となった学力向上の取組を推進する。
- ・学年で決められた学習時間を確保する課題を与える（家庭学習の手引き参照）。毎日の宿題は、できる限り国語・算数・音読を基本とし、週に一回以上、自主学習または読書の課題を行う。
- ・3年生以上で自主学習に取り組む。学年に応じた自主学習の取り組み方について提示し、自ら課題を設定し、自主的に学習を進める力を育む。内容については「家庭学習マニュアル」を活用する。
- ・学期に1回、家庭学習強化週間の実施にあわせて、落ち着いて家庭学習を行う習慣を定着させる。

⑤全国学力・学習状況調査の分析

昨年度の学力学習状況調査の結果から見てきた本校児童の課題は以下の通りである。

国語

- ・漢字…漢字の形は正確に捉えているが、熟語に対してどの漢字を書けばよいかわからない。
→熟語や例文など漢字のもつ意味を捉えられるような学習を行う。
- ・条件を満たす記述…複数の記述の条件があるにも関わらず、どちらの条件も満たしていないような記述や、一方しか満たしていない記述が多い。
→ループリックを活用し、記述の観点を意識させる。

算数

- ・図形…図形の正しい定義や面積を求める公式の意味を理解せず、感覚的に図形を選択したり、公式に数を当てはめる児童が多い。
→図への書き込みや具体物の操作を実際に行い、図形や垂直・平行などの定義、公式の意味について実感させながら理解を図る。

これらの単元及び学習活動に関わる授業について、全学年で重点的に指導する。

また、今年度も全国学力学習状況調査及びみえスタディ・チェックの結果を全職員で分担し、採点・分析する。児童の強みや弱みを共通理解し、弱みの見られた単元・領域を把握する。その単元・領域に関連する各学年の学習内容を教科ごとに系統表で把握し、学校全体で重点的に指導する。また、市や県の結果が公表された後には、S-P表を読み取り、さらに詳しい分析を進める。それらの分析結果を基に学校全体としての取組を検討していく。

⑥非認知能力の育成

非認知能力とは物事に対する姿勢や取り組み方、他者との関係の構築など、日常生活や社会活動において重視される能力を指す。学習する姿勢の基礎を形成することは、認知能力を育成する上で重要である。研修部としては、特に「やりぬく力」と「自制心」の2つの非認知能力の育成に力を入れていきたい。

「やりぬく力」の育成

目標に向けて粘り強くやりぬく力を育成するためには、児童が自らやろうという意志を少しずつ持てるようにするために、行動する意味や意義を感じられるようにする必要がある。日々の授業における具体的な方策としては、子どもが自分事として取り組みたくなるような単元の目標を示し、その目標に向かった授業を計画していきたい。

これにより、児童が自分の経験や興味に関連させ、自分事として学んでいけるようにする（精緻化）。また、学習に取り組んだ結果、少しずつ目標に近づいているということを理解させることで、学習成果のメリットを感じさせることができる。単元目標の提示により、児童自身が学習や活動に取り組む「意欲」や「価値」を高めることを目指したい。

「自制心」の育成

自制心の低い児童は、面白いと思えない課題に取り組まなくなってしまう。そこで学習の活動や内容を構造化して取り組みやすくする必要がある。そこで、先に述べたループリックを活用しながら課題に取り組ませることで、自制心の育成を行う。複雑な課題をループリックで分類することで、シンプルに感じられるように提示し、児童が取り組みそうだと思うようにする（体制化）。また、数あるループリックの項目の中から、「これならできそうだ」「これは簡単そうだ」と思える項目から意識して取り組ませることができるため、段階的に目標へ近づくことができると考える。つまり、ループリックの活用により、児童自身が学習や活動に取り組む「見通し」を高めることを目指したい。

⑦「読む・書くワークシート」の活用

言語能力や情報活用能力、論理的思考力を育成するため、1・2年生は「読む・書くワークシート」、3年生以上は「読む・YOMU ワークシート」に取り組ませる。問題を解かせるだけでなく答え合わせや解説を丁寧に行うことで、学力向上を目指す。また、効果的な取組となるよう一定の期間に集中して行うのではなく、計画的・段階的に取り組むため、いつ、どのワークシートに取り組んだのか学級ごとに記録していく。

4 年間計画

一 学 期	4月 9日（火）研修部会 研究主題と研究の方向性の検討 4月18日（木）学力学習状況調査（6年） みえスタディ・チェック（4・5年） 4月22日（月）第1回校内研修会 今年度の研究の方向性について確認
	5月 1日（水）第3回校内研修会 学力学習状況調査の結果分析 5月 7日（火）研修部会 研修実施計画の検討 5月15日（水）職員会議 今年度の研究について 研修実施計画の提案・検討
	6月 日（ ）第3回校内研修会 2年提案授業・事後検討会（学年部研）
	7月 日（ ）研修部会 1学期の振り返り
	8月 日（ ）第4回校内研修会 学力学習状況調査の結果分析
二 学 期	9月 4日（水）第5回校内研修会 6年提案授業 事前検討会 9月19日（木）第6回校内研修会 6年提案授業 事後検討会（全体研）
	10月 日（ ）第7回校内研修会 4年提案授業事後検討会

	11月 6日（水）校内研修会 1年提案授業・事前検討会 11月27日（水）校内研修会 1年提案授業・事後検討会（全体研）
三 学 期	1月 日（ ）研修部会 3学期の取組・今年度のまとめについて 1月 日（ ）第8回校内研修会 5年提案授業・事後検討会（学年部） 1月 日（ ）第9回校内研修会 今年度の研修のまとめについて提案
	2月 日（ ）みえスタディ・チェック（5年） 2月 日（ ）第10回校内研修会 年間総括 2月 日（ ）研修部会 年間総括を受けて
	3月 日（ ）第11回校内研修会 来年度に向けて